

尾道駅

2019 年にオープンした新たな尾道駅は、街の理想的な玄関でもあり、瀬戸内海地域全体の集約でもあります。ほぼ街の真ん中にあるこの駅は、最初にどのような手段でここを訪れたのであったとしても、見逃すことはできません。格別に幅の広いメイン玄関は、慌ただしい通勤客たちが電車に向かって急ぐためだけにあるわけではありません。あなたが初めて見る尾道の景色（古めかしい街灯の立つ駅前広場が、尾道水道や、その向こうの島々へと続いていきます）をフレームで縁取って絵葉書のように見せてくれるものでもあり、そのフレームは、通り抜けて向こうへ歩いて行くことができます。

尾道駅は屋内も同様に革新的で、2 階にはブックラウンジやカフェ（「喫茶 NEO」）や、尾道水道の景色を一望に見張らせる展望デッキがあります。2 階にはエムスリーホテルもあり、そこは宿泊客にプラットフォームが見渡せる共有スペースを提供しています。人を観察したり、電車を眺めたりするのに最適です。あるいは、時間までそこで過ごしてそこからプラットフォームにダッシュしてもいいかも。駅舎の高い天井をフルに活用したエムスリーホテルには、広島産の杉で作られた寝台車式のバンクベッドがあり、バンクベッドは、伝統的な板倉工法で作られています。バンクベッドの柱と柱の間にプレカットした板を差し込んでいくもので、漆喰塗りの必要がなくなるという工法です。

長くて低い建物の規模と形状は、高さのある近隣のホテルやオフィスビルと故意に対比させています。目を直に上に向けさせるのではなく、尾道駅の軒の低い傾斜した屋根は、まずは駅前広場へと視線を誘導し、それから駅の裏にある丘へと向けさせます。外から見た駅舎は、尾道水道や駅前広場と上の山頂とを結ぶ傾斜台のようにも見えます。

新しい駅舎は建設に約 2 年かかり、設計は、東京の建設会社「アトリエ・ワン」が指揮しました。建物は新しくてもこの駅には長い歴史があり、それが新たな駅舎のデザインに織り込まれています。異彩を放つ屋根の形状は、大正時代（1912 年～1926 年）に建てられたオリジナルの駅舎の屋根を基にしています。古い駅舎の梁は、ブックラウンジのテーブルと椅子として使われ、エムスリーホテルのラウンジの壁は、元の建物のレンガで作られています。

尾道駅は、旅行客も地元民も訪れたいような場所としてデザインされています。プラットフォームで待つよりも、1 階の「おのまる商店」をチェックしてみましょう。さまざまな地元の食品や尾道で作られた商品を販売しており、自転車のレンタルもしています。他の駅とは異なり尾道駅は、電車を待つ時間もお楽しみ体験に変えてしまいます。